Ⅲ　事例調査報告書（平成 19 年 6 月　地域活動）

【特定非営利法人ＦＯＲＹＯＵにこにこの家】

1　日時・場所

平成 19 年 6 月 5 日（火）

仙台市教育局第１会議室

2　講師

特定非営利法人ＦＯＲＹＯＵにこにこの家代表、東四郎丸児童館館長　小岩孝子　氏（肩書きは調査当時）

3　講義概要

私たち「特定非営利法人ＦＯＲＹＯＵにこにこの家」は、「地域から生まれ、育ったＮＰＯだから」ということを大切にして 13 年間活動を行ってきた。私のボランティアとの出会いは東中田市民センターでの「介護ボランティア入門講座」であったし、ボランティア活動の始まりも東中田保健センターの機能訓練の手伝いからであった。平成 8 年に地域の方々の「あったらいいな」という気持ちを拾い上げてミニデイサービス「にこにこくらぶ」を始めたが、その当時は、現在のようなデイサービス、介護保険もなく、何らかの障害を持った方々はリハビリのために保健センターに集まっていた。その中で、その方々が私たちと同じようにどこかに行きたい、食べたい、見たい、知りたい、やってみたいという希望があることや、同時に介護をしているご家族の方が郵便局に行くとか、コーヒーを飲むとか、そうしたちょっとした時間があればいいという希望があることを聞いて、それでは「なんとかしなくては」と思ったことが始まりとなった。初めは毎週木曜日に市民センターの調理室と保健センターの一室を借りて、8 年間継続して活動してきた。

ミニデイサービスからの卒業のきっかけは「にこにこの家」を立ち上げようと思ったからで、そのきっかけも市民センターと一緒に行っていた「子どもボランティア講座」であった。今も毎年行っているが、地域の小学生を集めて白杖や車椅子の体験、ミニデイサービスのお年寄りとのお話や手伝い、市民まつりの模擬店の手伝いなどをしてもらっていた。その中で、子どもたちの「お年寄りは僕たちより元気だ」「年をとるのはいやだと思っていたけど悪くないかも」という声や、デイサービスの利用者の方々の「子どもたちがくると 10 年若返る」という声を聞いて、また「なんとかしなければ」と思った。すごいと思ったのはボランティアに来た子どもたちが、反対にデイサービスの利用者たちに元気をもらっていて、その相乗効果というのが大きかったことから、大人も子どもも何らかの障害を持っている方も一緒に過ごせるようなところを作りたいな、と思って「にこにこの家」を作った。

そうして「ランチつきカルチャーサロン」、デイサービス、子どもの一時預かりを行ったりして、活動を続けていく中で利用者の方が障害のある方だけではなくなってきた。

小学校、中学校からボランティアに来る子どもたちもたくさん増えて、校長先生などの先生方に「にこにこの家に行くと子どもたちの顔が変わるんだよね」「いい顔になって帰ってくるんだよね」と言われたことや、少し問題のある子どもが「にこにこの家でおばあちゃんにありがとうのちゅーされたんだよね」と先生や他の子どもたちに何度も話した、その時からだんだん変わってきたということを聞いた。このようなことから、私たちは「にこにこの家」を地域に残していきたい、私たちの次の代、また次の代につながっていけばいいなと思ったので、ＮＰＯ法人を設立することになった。

また、ただのボランティアではなくて地域に根ざす活動をしている団体として地域の方々にもっと知ってもらいたいと思った。私たちも地域に団体があるのは知っていても、どんな活動をしているのかまではわからない状態だった。それで、「にこにこの家」を立ち上げてから 1 年後、実際はその前の平成 12 年頃から地域の民生委員、ボランティア、福祉関係の人などが保健センターに集まって情報交換をしていくうちに、色々な施設の問題が浮き彫りになってきて、この問題をどうするかといった時に、講習会をしようということになった。それから「助っ人マップ」というのを作って、病院、市民センター、コミュニティセンター、ガソリンスタンド、コンビニエンスストアなど地域の色々なところに貼らせてもらって、こういう活動をしている団体があるということを知ってもらおうと試みた。その他にも、活動の年間カレンダーをつくって新聞の販売所に協力してもらい、3950 戸に無料で配布して、更に「知ってもらおう」ということを始めた。その時も面白くないといけないと思い、マスコットの「助っ人くん」を作り、この助っ人くんが現在、東中田のガソリンスタンドやコンビニエンスストアに貼られているところである。

このように地域に色々な団体があって情報交換していく中で、そのネットワークを組織化しようとした時に、私たちの「にこにこの家」が「ほっとネット in 東中田」の事務局と代表になったのだが、当初は色々な団体があるのでそれぞれの目的が合わないのではないか、定例会も月１回程度集まっているが、仕事として行っている団体も来てもらえるのだろうか、というような心配をした。だが、みんな「地域を良くしていきたい」、「地域で活動している団体だから、地域とつながりたい」という同じ気持ちを持っているということがわかって、それからはあまり悩まずに相談しあって活動できており、6 月には地域の方々に向けて、おれおれ詐欺などを題材とした「暮らしのセミナー」を開催することになっている。また、昨年の仙台市の地域福祉セミナーでも発表する機会があったのだが、ただ話すだけでは面白くないので、「ほっとネット劇団」を作ってたかばあちゃんとやすばあちゃんが出てきて説明をするという方法をとってみた。今度はこれを地域の方々の前で行いたいと思い、定例会の際に最後に流す鎌田行進曲で踊るダンスの練習をしている最中である。

「ほっとネット in 東中田」の事務局をして、その後児童館の運営を始めて３年目となるが、児童館の指定管理を受けるきっかけとなったのは、始めは市子供未来局の子育て

支援助成を受けて一時預かりを行っていたのだが、これで子育て支援の大切さを知るようになって、色々な問題を抱えている家族や核家族が多い中で、地域で子育てというのが大切なのではないか、と思ったからである。現在は、「子どもたちが地域を知ること」、「地域で子どもたちを守ること」、「地域の中に子どもと親をつなぐこと」が大切なのではないかというところから、色々な取り組みをしている。「子どもたちが地域を知る」ということでは、「子ども 110 番探検隊」という企画で、子どもたちと一緒に 16 地域の子ども 110 番の家を回って子どもたちの顔を知ってもらう、また 110 番の家の方の顔も子どもたちに知ってもらう、ということで地域につなげることを狙いとして、探検隊が終わった後は、子どもたちがマップを作ってこども 110 番の家に持っていき掲示してもらっている。「地域で守る」ということでは、平成 17 年度の秋に広島で殺害事件があったと思うが、その時に地域の方々に「夕方にランドセルを背負った子がいたら、地域の方が見守ってください」という内容のお手紙を出した。そうしたら地域の方たちの中から「私たちが児童館から子どもの家まで送ってあげましょう」というボランティアが出てきて、現在「にこにこ児童見送り隊」として 9 人が活動している。また、「にこにこ児童館応援隊」として、大学のボランティア愛好会やアーチル（市発達相談支援センター）、発達障害のサポートネット、地区社会福祉協議会、連合町内会長、コミュニティセンター事務局、校長先生、市民児童委員など色々な方とつながりを持ってもらって、私たちができないこともみんなで助け合ってできることがあるのではないか、ということで活動の「応援隊」を結成している。応援隊の隊長には、大学のゼミの研究の調査対象として私たちが協力したことが縁で、その時の東北大学の先生に隊長になってもらっている。その他、子どもたちは、核家族が多くなってふれあいが少なくなってると思い、地域にケアハウス等がたくさんあるので、そこのお年寄りと一緒に「にこにこひろば」を作ったり、小学校、中学校の子どもたちのボランティアを募って児童館の企画運営なども相談しながら行っている。

私たちは市民センターの講座から生まれたＮＰＯで、今も市民センターと保健センターと関わりを持ちながら、協力し合いながら、色々な活動をしている。地域の中で、「私たちがする、私たちがつくる、私たちがつなげる」、その私たちは地域に住む一人ひとりで、地域は私たちが住んでいる東中田であったり、太白区であったり、仙台市であったり、宮城県であったり、と考えている。「ほっとネット in 東中田」のテーマにあるとおり「地域の一人ひとりがどこかとつながっていけたら安心して暮らしていけるのではないか」と考えている。

4　質疑応答

Ｑ1　きっかけとなった東中田市民センターでの「介護ボランティア講座」の回数や参加者の内訳はどのようになっていたか。また、共に活動することになった７人の職業等はどのようなものか。

Ａ1　講座の回数は 10 回で、参加者は 35 人、年齢層は 50 代女性を中心に女性：男性が 3：

2 くらいの割合で、主婦、パート、講座が開催された木曜日が休暇の人などが参加していた。活動を始めた 7 人は、全員女性で主婦、塾講師、水泳の先生などをしていた人であった。

Q2　「にこにこの家」はどのような場所で行っているのか。

A2　一軒家を借りていて、元診療所だったためフラットな造りでこのような活動をするには適している場所である。

Q3　家賃はどうしているのか。

A3　家賃はふれあいデイホームの助成金と自助努力で賄っていて、個人としての持込は絶対にしないようにしている。

Q4　継続して活動する中での障害は何か。

A4　障害に突き当たることはたくさんある。例えば今年度になって急にホームの助成金がもらえなくなったため、利用者に相談して送迎料を 300 円だったのを 400 円にしてもらったりした。それとボランティア、スタッフの気持ちを一つにすることも難しいところがあって、いつも話し合いを持ちながら進めている。

Q5　市民センターとの関わり方について伺いたいが、「市民センター・保健センターの協力で 8 年間ミニデイサービスを提供」とのことだが、市民センターの協力、関わり方は具体的にどのようなことになるか。また、この活動以外にも関わりがあればご報告いただきたい。

A5　まず、最初にミニデイサービスをやってみたい時に市民センターの館長に相談した。当時O157 が流行していたが、できれば手作りのランチを普通に大家族が集まるように食べてもらいたいことを説明したところ、館長から調理室を貸すのは問題ないが衛生課にも相談した方がよい、とのアドバイスを受けた。このような助言がとても大きなことで、直ぐに衛生課に行ったところ、衛生課でも協力してくれてボランティア全員が講座を受ければいいということになり、その講習も市民センターを会場として行った。

　また、8 年間毎週市民センターを会場として空けてくれたり、保健センターも荷物置き場としてあまり使用していない部屋を貸してくれたりした。このような協力により私たちは活動がしやすくなり、それを代々の市民センター館長が私たちの活動を理解してくれ、次の人につないでくれた。職員の方も同様に相談に乗ってくれたので活動を続けてこれた。

　今は市民センターは卒業したが、福祉バスの乗り入れの場所の確保、子どもボランティア講座、市民まつりなどの企画でも一緒に活動しているなど、保健センターとともに継続して関わりを持っている。

Q6　場所の提供以外には、どのような相談をしていたか。

A6　平成 7 年当時はボランティアで配食という事例はあまりなかったのだが、この活動を理解してもらったということが私たちにとっては一番大きな協力だったと思う。

何か始める際に市民センターと保健センターに相談して、アドバイスをもらった。利用者が増えて週 1 回では間に合わない状況になり、でも市民センターを週 2 回借りるのは地域の一員として申し訳ないと考えて、市民センターを卒業させてもらったが、その時も相談させてもらった。現在でも掲示板には私たちの会報を貼ってもらったり、利用者の作品を飾ってもらったりして関わりは続いている。

児童館で指定管理を受けるときも、（財）仙台ひと・まち交流財団の東中田児童館の館長に相談に行って、資料づくりの参考となる本を貰ったりして進めていった。

Q7　ＮＰＯ法人となるときもそのようなアドバイスが大きかったのか。

A7　ＮＰＯ法人になるときは、私たちのボランティアスタッフの中で「にこにこの家」を残していきたいという気持ちが強かったので、その際は相談しなかった。

Q8　現在の会員数はどのくらいか。

A8　ミニデイサービスを利用している人が 75 人、ホームを利用している人が 65 人、ボランティアスタッフは 29 人となっている。

Q9　ボランティアスタッフの構成はどのようになっているのか。

A9　年代は 20 代から 70 代近くまで。「にこにこの家」を始めてから、それまで 30 代から 60 代が中心であったが、若い世代の主婦やパートの方が参加してくれるようになった。

Q10　ボランティアの方が集まってくれるきっかけは何か。

A10　最初は講座を受けた 7 人から始まったが、その後に私がボランティアを始めたことを聞いた地域の方が電話をくれて手伝ってくれるようになった。それと保健センターだよりにボランティア募集の広告と活動の内容を載せてもらって、それを見た方が来てくれるようになった。今は地域の色々なところに「にこにこの家」の情報があるので、それを見てボランティアをしたい方が集まってくれている。

Q11　東中田地区の地域特性は。

A11　昔から農業をしている方々もいるが、市営住宅が多いので新しい住民や母子家庭、一人暮らしのお年寄りも多い地区でもある。

Q12　市民センターとは色々な形で連携しているようだが、町内会との関係はどうか。

A12　町内会の連合会長には「にこにこ児童館応援隊」に入ってもらっているし、私自身が町内会の理事や児童連絡協議会の理事などになっているので、町内会の方々とは集まる機会も多く、つながりも持っている。できれば、「ほっとネット」にも町内会が入ってくれれば、さらにつながりが持てて「助っ人マップ」もいきいきしてくるのではないか、縦割りではなく横のつながりが大切なのではないかと思っている。

Q13　「にこにこの家」の本部は東四郎丸児童館の中に置いているのか。

A13　「にこにこの家」は独立した建物になっていて本部もそこに置いている。マップを見ていただければわかるとおり、市民センターの近くにある。

Q14　ＮＰＯの事務局の費用はどうしているのか。

Ａ14　ふれあいデイホームでの家賃助成と会員からの年会費 3,000 円と利用代金 1,500 円を充てている。「ほっとネット in 東中田」の事務局も私が古くから活動していたこともあり、また各団体に置くよりもＮＰＯに置いた方が動きがよいので定例会等も「にこにこの家」で行っている。

Ｑ15　ＮＰＯというと地域を超えた活動をする場合もあると思うが、東中田だけで活動しているのか。また、今後どのように考えているのか。

Ａ15　地域は東中田だけではなくて、太白区、仙台市とつながっていくものだと思うので、これからの活動の広がりを考えているところである。太白区社会福祉協議会の理事にもなっており、長町などで発表したりする機会もあるので、「にこにこの家」というのが地域だけに知られているのではなく、別の形でもできないかというのは私たちの課題でもある。

Ｑ16　現在のボランティアスタッフの 29 人は、地元の方なのか。

Ａ16　泉区から来てくれた方もいたが、ボランティアはそんなにお金が出るわけではないので通いきれなかった。気持ちはあっても時間が取れない方もいて、難しいところだと思う。

Ｑ17　やはり、ボランティア活動において、歩いていける距離というのは大切だと思う。将来的に地域を広げていきたいとのことだが、どのような形での広がりになるか。

Ａ17　今は必然的に広がっている状況で、例えば、袋原小学校の校長先生と特別支援学級のことで色々な取り組みをしていて、アーチル（市発達相談支援センター）の方とも話し合う機会ができて、アーチルで活動しているお母さんのグループが、6 月に東四郎丸児童館に来て話をしてもらうことになっている。こうしたつながりの中で広がっている感じで、具体的にどういう形というのはないが、別の地域ともつながりが広がっていけばいいと考えている。

Ｑ18　「にこにこの家」は月・火・木曜日とのことだが、今後もそのくらいの回数で活動していくのか。

Ａ18　スタッフが無理なくできるようにこのくらいでいいと思っている。超高齢化社会になるということでボランティアも高齢でいいじゃないか、気持ちが若ければいいじゃないか、ボランティアもそこに行く場所があることで元気になっているので、そうした場をつくることも私の仕事かなと考えている。

Ｑ19　土・日曜日は活動していないので、働く男性の協力を得ることは現在は考えていないのか。

Ａ19　例えば夏休みのお祭りを一緒にするとか、助っ人マップにもある「ひまわり会」で町内の人が集まってそうめん流しをしたりとかの活動はしている。ただお父さん方、男性というのは腰が重いという印象はある。今後、団塊の世代が退職もあって、そういう方々がボランティアに参加できるようなことをやりたいと考えている。

Ｑ10　「ほっとネット in 東中田」では、「子ども 110 番探検隊」の例もあるとおり密接

に関わっていると思うが、学校との連携はどのような状況か。

A10　「ほっとネット in 東中田」は、福祉関係のネットワークということで団体の中には入っていないが、「ひまわり会」は四郎丸小学校にある団体で学校の先生が担当していて、会議にはお母さんが出てきているし、「にこにこの家」を始め色々な団体が学校と連携して活動している。先ほど話した「子どもボランティア講座」を市民センターで開催したことで、袋原小学校の子どもたちが「にこにこの家」にたくさん訪ねてきたことがあり、それを聞いた担任の先生が挨拶にきた。その先生が活動を見て「にこにこの家」に今年も 5 年生を十数回連れてきたりもした。

【松陵っ子土っと来い】

1　日時・場所

平成 19 年 6 月 5 日（火）

仙台市教育局第１会議室

2　講師

仙台市松陵西小学校教頭　瀬戸幸子　氏（肩書きは調査当時）

3　講義概要

私は、平成 12 年度に高砂市民センター、地区市民センターの財団委託に伴い平成 13 年度から平成 16 年度まで中央市民センターに社会教育主事として配属されていた。

「松陵っ子土っと来い」のチラシには「過去 3 年間、地域ボランティア団体や松陵市民センター、松陵児童センターの連携により、学校休業日の子どもたちの遊びや活動を支援し、地域で子どもたちを育てていきたい、との願いを込めて、子どもたちの居場所づくりに取り組んできました」とあるが、3 年間とは、平成 13 年度から 16 年度を指しており、この活動は「学びのコミュニティ推進事業」として実施された事業である。この事業はご存知のとおり、文部科学省から年間 20 万円、3 年間で 60 万円の予算が出ていたが、4 年目の平成 17 年度からの全く予算がなくなった時に、松陵西小学校に着任し、この事業を任された。

「これまで 3 年間は、仙台市から助成金をもらって活動を続けてきましたが、17 年度からは、松陵小並びに松陵西小ＰＴＡ、そして各町内会から予算支援をいただいて活動を続けていきたいと思います。(「ＰＴＡ総会や町内会総会でご承認くださいますようお願いいたします」)」とあるが、その時点では町内会にも全く理解されておらず、「土っと来い」のことも知られていなかった。

「土っと来い」の狙いは、学校のない土・日曜日にスポーツ少年団などに入っていない子どもたちの居場所づくりができないか、というところから始まった活動であるが、まず、そこに関わっていた方々に話を伺うために連絡協議会を開催した。

そこで課題となった「お金がなくなったがどうしていくべきか」という相談をしたところ、ボランティアグループの方々から、尻つぼみにはさせたくない、お金がないから止めるということにはしたくない、との申出があって、協議会に参加した方が全員一致で続けていこうということになった。ただ、町内会でそうであったように「土っと来い」が地域に知られていなかったこともあり、とにかく活動を見てもらわなくてはいけない、そして理解していただいた上で支援してもらうという方法にしようということになった。それで、各町内会長に年１回実施している「土っと来い祭り」に来てくださいとのお知らせをして、平成 17 年度は地域に理解してもらう年度と位置づけた。予算は、松陵小と松陵西小ＰＴＡから１万円ずつ出してもらったが、お金がなくとも遊びを工夫すれば何とか乗り切れるとの考えでやりくりをした。地域のスーパーへの協力依頼では、市民センター館長に活躍してもらい、お金ではなく商品の景品の余りを大量に譲り受け

てもらったりもした。

平成 18 年度になって、内容に行き詰まりを感じるとの声が聞こえてきたので、では企画運営を工夫しようということになった。まず、何かと共催で活動を実施しようということになって、松陵市民センターの事業として「松陵っ子土っと来い　ガス局・港工場見学会」を行ったが、この際も受付や子どもの取りまとめなどは、お母さんたちや私が担うなど協力して実施した。名前を知ってもらうために、このような子どもを対象とした事業には何にでも「土っと来い」の名前を使うように心がけた。

また、子どもの受付でも市民センターに活躍してもらい、月から金曜日までの受付は学校で、土・日曜日や夜の受付は市民センターにお願いして、受付の窓口を増やした。「松陵っ子土っと来い　ウォークラリー」などは声がけにより複数の団体を巻き込んで実施し、学校と市民センターの申込を調整してグループ分けも協力してもらうなど連携して進めていった。

活動を続けていく中で、子どもたちから「知っていれば参加したのに」との声も聞かれたことから、ポスターを貼るだけではなく、企画を知らせるために学校の昼休みの全校放送の後に私が「土っと来い」企画の宣伝をしてみた。すると、企画前日の放送による宣伝は効果的でたくさんの子どもを取り込むことができた。

平成 19 年度に入って、松陵小学校と松陵西小学校の児童数に 5 倍の差があるところから各ＰＴＡに児童数に応じた負担のお願いをして、松陵西からは１万円、松陵からは 5 千円として、さらに予算は少なくなったが、お金がなくとも何とかできるという自信ができていた。事務局については、地域の子どもは地域で育てる、ということからも地域に事務局を持って生きたいとの願いをみんな持っていたが、今回は引き継ぐところまでは至らなかった。ただ、中身としては役割分担などのところで、少しずつ引き継いでもらっているところもあるかな、と考えている。

トライアンドエラー、とにかくやってみる、というのが私たちのスタンスなので、やっていくうちに「こうすればよかった」などを話し合いながら、ボランティアの負担にならないように細く長く続けていければいいかな、と考えている。続いているところの良さとして、終わった後に「あれがよかったね」「これがダメだったね」という話が直ぐに出るので、次にどうすればいいかが直ぐに事務局で把握できているところではないかと考えている。

連絡なども、たくさんのボランティア団体が関わっているが、中には複数の団体に関わっているお母さんもいるので、ここに連絡すると全部に広がる、というのが分かって事務局も負担にならずにできている。

市民センターとの関わりとしては、最初は年１回のお祭りを学校の体育館で開催していたところもあって、2 日間のうちの最初の日の午後だけでも子どものためのお祭りにできないか相談して、「土っと来い」で市民センターのホールを借りることになった。そうなると市民センターは地域の連携に強いので、老若男女がこのお祭りに来てくれて、

「土っと来い」を知ってもらう大きな機会となった。また、「土っと来い」で協力してくれている絵本の会の方も市民センターでのボランティア講座で立ち上がったグループだと聞いているし、環境サークルの方も市民センターで活動している際に声がけしたところからつながりが持てている。

「この人はこういうことをするひとのはずなんだけど」ということから違うことができる発見がある。交通指導をする方の集まりだったが、その方々は昔の遊びが得意だったので教えてもらっていたら、その時の仙台弁が面白くて方言の勉強に来てもらうことになった。一人の人が違う顔で登場することによって、子どもたちはとても親しみを持って、楽しさを感じているようである。

「人、物、金」とよく言われるが、「物、金、人」「金、物、人」ではなく、人が最初にきているということが、この事業に関わってつくづく感じているところである。

4　質問事項

Q1　「土っと来い」の主要なスタッフは何人くらいで、ＰＴＡの役員と兼ねているのか。

A1　ＰＴＡ役員を兼ねている方は誰もいない。地域で活動している方々で少ないところでは 5、6 人のグループもある。

Q2　「土っと来い」の活動のとりまとめは一人で行っているのか。

A2　現在はそうであるが、活動している方々もノウハウが分かってきているので、地域に移せればいいなとは考えている。

Q3　その受け皿としてはどこを考えているか。

A3　やはり市民センターが地域の活動拠点としては相応しいかと思っている。

Q4　3 年間 60 万円の予算を受けていた時と、それ以降の活動はどこか違っているか。

A4　予算を受けていた時の状況はわからないが、フラフープなどの遊び道具を揃えることに使ったと聞いている。予算がなくなったと言っても、買った道具は残っているので、それを使って遊んでいるし、予算がなくなったからといってつまらなくなる、ということはないのではないか、と考えている。

Q5　　松陵地区ではない地域でも松陵市民センターのチラシが入ってくると思う、その際に「松陵っ子」という名前だとその他の地域の子どもは入れないのではないか。市民センターが中心になって行うのであれば、予算の面等で難しい面もあるかと思うが、市民センターを利用する地域全体に広げていくことも考えていかなければならないのではないか。

A5　　他地区から、参加してもらっても構わないし、名称も柔軟に考えたい。例えば「ふれあいコンサート」などは松陵西小学校の体育館を使用して行ったが、他の地区の小学校からも参加していて、他地区から参加してもらってもよいと思う。このコンサートはお年寄りから、小学生、幼稚園の子どもまでたくさんの方々が参加していてた。また、市民センターの関係だと、「ふれあい合唱団」という企画で「地域の歌を作って歌おう」ということになり、小学生に歌詞を募集し、近くの大学の軽音楽部が曲をつ

けて、小学生に歌ってもらった、という事例があった。

Q6　3 年間続いた時にたまたま市民センターで社会教育主事として地域的な活動を経験された方が来て継続するという形になったのか。もし、そういう方が担当として着任しなくとも活動が継続できるポイントのようなものはあるか。

A6　まずは、「やめたくない」という熱い思いをもった人が地域にいるかどうかということである。そして、市民センターの協力や学校での嘱託社会教育主事の育成などで絶やさないようにして、この活動がそれだけいいものだ、ということを地域の方、子どもたち、学校の職員など皆がわかってくれれば、続けていけるのではないかと考えている。

Q7　市民センターと「松陵っ子土っと来い」との関わりは、一番は活動拠点として市民センターを利用できるところだと思う。一方で市民センターは各種事業によりボランティアを育成することも大切であると思うが、市民センターでボランティアを育てて、小岩氏（講義 1 にこにこの家）のように活動している団体はあるか。

A7　「絵本の会」などは、お祭りの際に読み聞かせを松陵市民センターの図書室を利用して行ったが、これは市民センターで活動する読み聞かせボランティアの方々によるもので、その後、小学校でも朝の読み聞かせをしてくれている。3 年生が泉岳で野外活動をする際に泉岳の古民家まで自分の車で来てくれてお話をしてくれた。

Q8　市民センターの将来展望として地域コミュニティをどのように活性化していくか、ということを協議しているところだが、お二人の話を聞いていると地域のコミュニティが非常に活性化しているようである。市民センターとの活動の中で、こういうところを直して欲しいとか、こういうことができたらいい、などの視点があれば教えて欲しい。

A8　（小岩氏）例えば「ほっとネット in 東中田」で講座を企画した際に、1、2 月に市民センターに尋ねたところ、市民センターでは 11 月には次年度事業を決めてしまっているからできない、と言われた。ホールを借りるだけの話なのに、そのように対応されて戸惑ってしまい、結局児童館に併設されたコミュニティセンターで開催することにした。そんなに早い時期に企画を立てられる訳ではないので、もう少し柔軟に対応してもらえればいいと思う。児童館も含めてのことになるが、公的機関は皆に利用しやすいように動かなくてはいけないのではないか。コミュニティセンターも誰も利用していない時があり、もったいないといつも思っていて、例えば地域のお年寄りがきた時にソファもあるのでそこに上がって話せる場にしてもいいのではないか。児童館ではお年寄りに図書室などに自由に入ってもらっているが、「来い」ではなく「来て」という姿勢を出さなければと思っている。

（瀬戸氏）利用しやすい環境を考えるとやはり人だと思う。同じ断るにしても断り方があるように、職員の対応、姿勢だけでも市民センターが使いやすくなると思う。例えばウォークラリーの件で電話した際に「担当に替わります」などと言われ少しが

っかりしたので、市民センターの職員であったら地域で何が行われているのかアンテナを高くしておくことが必要ではないか。

Q9　嘱託社会教育主事の先生方が大事だと思っているが、学校との業務の兼ね合いでなかなか活躍できない状況もあると聞いている。育てた人を活用できないということをどのように解消していくのか。

A9　打ち合わせの時間を作るのも難しいことであるが、あえて、よい加減でいくためには、とにかく来てもらって、それから役割を割り当てるようにしてもらえば、活動を見て一緒にやっていくうちに、学校では見られない子どもの様子が見られる。〇〇くんは体育の授業では跳び箱 3 段しか跳べなかったのに 8 段も跳べたんだよ、という話をすれば体育指導の先生が顔を出しに来る、それが違う先生に広がっていくという感じで、個人的には、嘱託社会教育主事の先生だから社会教育に関する事業を最初から最後まで役割を割り当ててということではなく、とにかく来てもらって、やんわりと役割を割り当てていくほうが、長続きするのではないかと思う。人と人との関わりなので、読めないところの楽しさなので、とにかくやってみて、と言っている。